



武蔵野

埼玉大学図書館

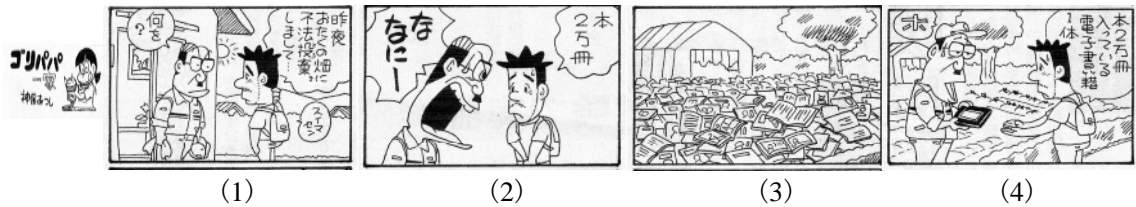
2010年11月15日 7号



特集 教育・研究と書籍

はじめに 大地が沸騰するほど暑い夏がようやく過ぎました。秋、灯火親しむ季節になりました。11月に入り、日もすっかり短くなりました。大学構内は狭しといえども、いろいろな植物が育ち、季節の移り変わりを感じさせてくれます。図書館前に赤い実をつける柿の木があるのをご存じでしょうか。かつては萩やススキなどの野草がところどころに花をつけ穂を出していました。残念なことに、耐震改修工事に伴い植え込みが整理され、これらの野草は姿を消してしまいました。大学内に残るささやかな自然は、私たちの心を和ませてくれます。野草・雑草のもつ風情・趣を大切にしたいものです。

本は、私たちの日常にありふれ、ことさら意識することもなく、書を友として過ごしている人が多いのではないのでしょうか。夏の喧噪が静まり、灯下に心静かに書を開き、思索を深める楽しみが広がります。そこで、今回は読書の秋にちなんで「本」をテーマに、寄稿をお願いしました。本を一つの材料に、来し方を振り返るもよし、私たちが生きる今このときを省察するもよし、皆さんに思いのままに、多彩な話題を提供していただきました。「本」から生み出される一つ一つのエピソードには、それぞれに感慨、思い出、期待、希望、そして意見や主張が込められていることでしょう。



(1) (2) (3) (4)

「ゴリパパ」

(神保あつし、日本農業新聞：2010年9月9日)

情報技術の飛躍的な発達は、わたしたちの読書生活にも大きな影響を及ぼしています。電子書籍はその代表です。B5版ノート程度の大きさの「電子ブック」が、デジタルデータとして大量の書籍・情報を私たちに提供してくれます。そんな時代が到来したのです。電子書籍が私たちに与えた衝撃の大きさは、関連する本が多数出版されていることにも表れています(村瀬拓男・電子書籍の真実・マイコミ親書、佐々木俊尚・電子書籍の衝撃・デスカバー選

書、前田壘・紙の本が亡びるとき?・青土社)。書籍文化が大きな過渡期を迎えていることは、神保あつしの4コマ漫画に象徴的に表現されているのではないのでしょうか。書籍と電子書籍は対立するものではなく、ともに独自の特徴と長所をもつものでしょう。さわやかな秋空のもと、本と私たちの多様な関わりを考え、未来を展望してみても有意義なことではないでしょうか。

最初は、自然豊かな山梨県の小さな小

学校からの寄稿です。全校生徒 37 名の学校には、子どもが気軽に本に親しめるよう、廊下を利用した読書スペースが設けられています。畳み敷の「オープン図書室」がそれです（写真）。木調の校舎と和風の図書空間が調和し、独特の柔らかさと温もりを醸し出しています。二つめは、障害を持つ子どもと関わる学生からの寄稿です。子どものハンディキャップの違いによって、本の活用の仕方も異なります。三つ目は、書籍の電子化と普及が、教育現場にどのよう

な影響や変化をもたらすのか、斬新な視点で現職教員の大学院生から寄稿いただきました。第四は、読書愛好家の観点から、電子書籍と書籍それぞれがもつよさや利点について寄稿いただきました。最後に、大学の教育・研究そして文化の発展に大きな役割を果たしてきた埼玉大学生協の活動とその意義について、理事長である経済学部岡部先生に寄稿いただきました。「けやきの窓」は、外山昇先生の推薦書です。（図書館長 坂西 友秀）



過疎という問題に何処よりも早く直面した 早川南小学校について

昨年になります、東京工業大学より研究のために、協力していただけないでしょうかと打診があり、協力したことがありました。内容は大学院生・大学生が一週間ほど学校内において、学校内の施設設備がどのように利用されているか実態調査をするというものでした。どうしてそんなことを調べるのですかの質問に対して、こんな回答がありました。これから少子高齢化が進み、小規模校の学校建築に対する需要が増えることが予想されています。早川南小は小規模校の建築として各所に優れた点があるということでその世界（学校関係の設計に関わる）では有名です。との説明を受けました。なるほど、玄関スペースは広くて、廊下も広くて、その一部分が図書スペースにな

っています。1・2年生は二階の図書室へ行かなくても、時間がちょっとだけしか無くても本を手にとって読むことができます。などをはじめ地域の社会教育施設という点からも建物が設計されていて、体育施設・音楽施設とも子ども達はもとより地域の大人の使用に十二分に耐えうるものとなっています。

どうしてこんなすばらしいものになったのかを考えるといくつかの点が思い当たってきました。それはこの地が過疎という問題に何処よりも早く直面した点があげられます。昭和40年代から学校が統合されることが繰り返され、そのたびに学校とは？ということが議論されてきたのではないのでしょうか。



玄関前のプチ図書室



ちいさな図書スペース

その一つとして学校教育に吹奏楽活動を取り入れたことが揚げられます。特色ある教育の重要性が叫ばれて久しい中でその先駆的な取り組みを開始しています。それから40年以上を経過した中で、当時子どもだった世代が親となり、子ども達ともども吹奏楽活動をしている地域になりました。それから演奏者不足を補う為に本校に勤務する先生方も何かの楽器を担当するようになって15年以上になります。楽器を初めてという先生が多く上級生に教えてもらうことはあたりまえとなりました。毎年2月に「ありがとうコンサート」と題して子ども達はもと

より保護者も先生も演奏する発表会がありますが、なんとも数年で実現できる企画ではありません。永い目で地域の教育を考えた一つの成果だと思えるのです。それと同様に取組みされたものの一つが読書活動です。小さいときから本に触れる、大切だと言われ続けられている法則ですが、この点に関しても手抜かりはありませんでした。毎日昼休みの後15分間は全校で読書です。また、全校の先生方が読み聞かせ係となり毎月各学年をまわっています。これは今ではいろんな所でやっている話を聞きますので。



運動会玉入れ (村松画)



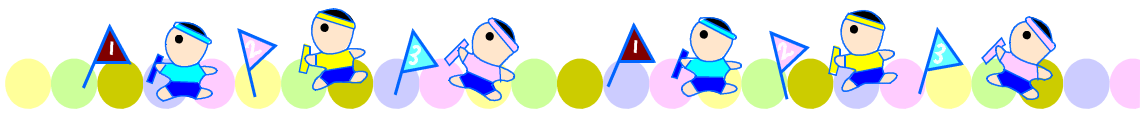
プラスの響き (村松画)

私がこの学校に来て一番印象に熱いことは、遊びや日常活動が異年齢集団で行われていることです。なにしろ全校児童37名ですから、学年でとか男女でなど言っていたら遊ぶこともできません。テレビが普及する前、いわゆる団塊の世代が地域で遊んでいた頃の姿が残っているのです。掃除も6年生が指示を出して下級生が協力して行いますが、これがまたいいのです。下級生は上級生の指示や指導を見ながら育ちます、当然けんかや不満が発生しますがそれらの解決方なども含めて小さいときから見ています。上級生ではどのように指示を出すか今まで

の先輩に負けないように考えてやっていかなければなりません。これは今まで経験した学校が何でも学級単位で行われていたので新鮮に映るのです。遊びや掃除など同じ年齢でやるから先生の負担は大きくなるし、日常生活の中で生きる知恵が付きにくくなり、いじめなどが起こりやすくなるのだと思いました。地域で遊ばない子ども達のことを考えるとき、テレビが普及し出した時「一億総白痴化」という言葉が流行したことを思い出すのは私だけではないような気がしました。

(山梨県早川南小学校校長 村松秀樹)





絵本を用いた活動が 自閉症児に与える効果について

私が所属している埼玉大学の学生によるサークル「かやの木」は、学生が約2週間かけて企画・準備した内容に沿って、様々な道具を用いた工作や、簡単な料理などの活動を行う中で、軽度の知的障害のある自閉症児とコミュニケーションを図り、子ども達の発達を支援することを目的としたサークルである。子どもたちは隔週日曜日に行われる日曜学級と呼ばれる先の活動をととても楽しみにしており、学生は子ども

も達より一足先に朝早く活動場所に集合して、リーダーを中心に子ども達が楽しく活動しやすいように机や道具の配置を行う。一通り準備がそろったところで続々と子どもたちがやってきて、子ども一人に対して学生が一人つくことで、ひとりひとりの子どもが安心して作業できる体制をつくり、子ども達全員が円滑に活動できるよう配慮している。

日曜学級にやってくる子どもたちの障害の程度

や年齢は様々であり、一言に自閉症児と共に遊ぶ活動といっても、それぞれの子どもの個性に応じた対応が必要不可欠である。事前にお母さんから子どもの性格や行動特性に関する話を聞き、さらに「子どもノート」と呼ばれている子どもの最近の様子が記録されているノートに必ず目を通しておき、子どもたちひとりひとりの情報を把握した上で学生は日曜学級に臨んでいる。

一般的な自閉症の症状と重なる部分も多いが、日曜学級に参加する子ども達に共通する特徴として3点が挙げられる。第一に、子どもの目をじっと見つめて話しかけても互いの視線が合いにくく、子どもに投げかけた言葉に対してはっきりとした反応を示すことがあまりない。そのため日曜学級の活動内容を身振り手振りで説明していても、子どもがどの程度まで理解しているのかが判断しづらいことが多い。しかし、活動開始時刻になると主体的に必要な道

具を準備し、「今日はこれ、これ」といった発言をする子どももおり、感覚的に理解したことを実



践しているような様子に驚くことがある。また、表情の変化があまりなく、伝えたいことを喜怒哀楽の表情で表現するといった情緒的コミュニケーションが欠如している

ため、子どもの表情から気持ちを読み取ることが困難な場面に出会うことも多い。

第二に、日常会話レベルの言葉の発達に遅れがみられ、自分の気持ちを主語、述語を上手く用いて話すことができない。

「切る、これ」といったような単語を並べて、自分の気持ちを整理しながら、独り言のように黙々と作業に取り組む子どももいれば、学生に何かを訴えかけるように言葉を発しながら作業に取り組む子どももいる。また、同じ言葉を何度も反復して

叫ぶ子どももおり、「ダメ、ダメ、ダメ」といったように必要以上に自分の気持ちを主張する場面が多々見られる。反復される言葉が含む子どもの意図を理解することが難しく、そのときの状況に応じて学生が各自判断し、子どもの主体性を尊重しながら共に活動を行っている。さらに、学生には理解できないような言葉を使うこともあり、その言葉は子どもが以前と同じ状況に遭遇したときにきまって発するので、子どもはその言葉自体に何らかの意味を含ま

せていることが予想される。

第三に、活動や興味の幅が非常に限定されていて、同じ活動や考えに固執する傾向がある。学生は前もってなるべく子ども全員が有意義な時間を過ごせるような活動内容を設定するが、子どもひとりひとりに異なる活動を行わせるのは準備に時間がかかり、子ども同士がばらばらに活動することにもなってしまうので、あまり有意義な時間を過ごすことは期待されない。そのため、どうしても数人の子どもにとっ

ては関心の薄い活動を行う日もあり、一度自分の興味・関心からそれてしまうと、自分がやりたいことにばかり注意が向き、席から離れて他の子どもの作業に割り込んだり、教室から出ていってしまったりすることがある。そのとき、学生が無理に席に戻させようとすると大声をあげて叫んだり、子どもによっては腕に噛みついてきたりするなど反抗的な態度をとることが多いため、なかなか本来の活動に再び参加させるのは難しくなってしまう。

誰しも幼少期に一度は両親から絵本を読んでもらった経験があると思うが、その活動に一体どのような意味があるのか深く考えたことがある人は多くはないと思う。絵本は親が一方的に読み進めるのではなく、おそらく親が子どもと対話しながら絵本を読み聞かせることが多いのではないだろうか。絵本と親と子どもの三者でメッセージをやりとりしながら、自分の頭の中で絵本の物語の内容を想像する。あるときは絵本の主人公に自分を重ね、またあるときは絵本の世界に入り込み、人になった私たちには理解できないような世界観の中で自分なりに物語を解釈しながら楽しんでいるように思う。

絵本は絵と文が同じ紙



面にかかれているため、絵本の内容を理解するには少なくとも一定水準以上の視覚、言語能力、つまり、視覚でとらえたものを想像する能力や、絵本に書かれている文や親が読んでいる文を理解する能力がないと、絵本のもつ効果を最大限に発揮させることは難しい。例えば、乳児期を対象とした絵本を大人が読んだところでおもしろみを感じることは少ないだろうし、逆に乳幼児にやたら

と複雑なストーリー展開の絵本を読み聞かせても子どもはなんの感性も働かせることはできない。やはり子どもの年齢や発達段階に合わせて、適切な絵本を読み聞かせてやることではじめて絵本が有効なものになる。

次に、日曜学級で絵本活動を行ったときの子どもたちの様子をもとに、知的障害のある自閉症児に絵本がどのような効果を与えるのか考察することとする。日曜学級で絵本活動を行ったときまず苦勞したことは、子どもが本を投げつけたり破いたりしてしまい、絵本を本としてとらえることができない子どもに対して、絵本を本として認識させるよう子どもに理解させることであった。学生が子どもを抱きかかえ

一度学生がペラペラと本をめくって見せて、子ど



もが絵本そのものに興味を示すよう試行錯誤しながら、なんとか絵本を読み聞かせる体勢にもっていくことができた。

あらかじめお母さんに子どもはどのような種類の絵本が好きか聞いていたため、子どもは絵本に描いてある絵を見て喜び、「車」や「うさぎ」といった自分の好きな絵が描いてある箇所を探し出し、その絵を見終わったらまた別の「車」や「うさぎ」の絵をしきりと探し出し始めた。私がその日担当していた A 君はカブトムシが好きであった

ため、絵本は昆虫がたくさんでてくるものを準備した。その子は絵本をめくり、すぐにカブトムシが描かれているページを見て、「カブトムシ、カブトムシ」といって満面の笑みで絵本の中のカブ



トムシを見ていた。そこで私が「カブトムシってどんな虫なの？」と聞くと、「黒、かっこいい、ポケモン」という返事があり、おそらく絵本の中

のカブトムシを、ゲームの中に出てくるカブトムシに重ね合わせて見ているように感じた。後にお母さんに A 君は実物のカブトムシを見たことがあるのか尋ねたところ、A 君は一度も見たことがないことがわかった。このことから、A 君はゲームの中でしか見たことのないカブトムシに対して、自分なりにその形や色を認識していたため、絵本の中にあるカブトムシも同じ「カブトムシ」というカテゴリーに分類することができたことになる。絵本の中には複数の色や形の違うカブトムシが登場するが、別のカブトムシがでてくると子どもはまた反応を示し、多少色や形が異なるものでも、絵を見ただけでしっかりとカブトムシと判断することができていた。

知的障害のある自閉症児に絵本の文を理解させることは難しいが、絵本に描かれている絵を用いることで、自分が現実の世界で見たことのないものに対して、自分の頭の想像上のものを絵本に描かれているものに重ね合わせて見る能力があることがわかった。このことから、自分の現実世界で認知しているものを絵本で再認識させることができたり、また逆に、絵

本で新たに認知したことを現実世界で再認識させることができたり



する可能性が示唆される。今回の活動の中では私は行うことができなかったが、絵本の中にかいてある文の中から少しず

つ言葉を拾って、言葉と絵を対応しながら読み進めていくことで、子どもは言葉と絵を見比べながらその両者を一致させることができる。さらに現実世界で見てきたものを絵本の中で探し出す作業の中で、子どもの想像力は豊かになり、徐々に興味の幅も増えていくことが期待されるのではないだろうか。

(教育学部教育心理カウンセリング専修4年 成瀬 西)

※ 既刊図書館ニュース「武蔵野」は、図書館ホームページ・「図書館出版物」をご覧ください。



「アナログ本」の存在感



今年は「電子書籍元年」なのだそうだ。確かに、過去にも電子書籍端末が出たと何度か聞いたことがあるが、誰かが持っているところを見ることなく、いつの間にか消えていったような気がする。私も実際使ってみたくと思ったこともなかった。しかし、今回の電子書籍は違う。ipadを持っている人には何度か会ったことがあるし（書籍として使っているかどうかはわからないが）、何より、正直「欲しいな・・・」と思わせるものがある。何冊も持ち歩かなくてもいいし（もう少し軽くなればいいと思うが、そのうちなりそうな気がするし）、今までに出版された本がさっと検索できて、欲しいと思えば、ものの数分で手に入ってすぐ読める。何千冊もの本を、場所もとらずに収納しておくことができる。アンダーラインも引いたり消したりできる。「ソーシャルリーディング」という方法も開発されていて、同じ本を読んでいる人同士、いながらにして読書会のようなことまでできるらしい・・・。私が今まで本を読んでいて悩まされていたのが、①置いておくのに場所をとる、②持ち歩くのが重い、③貸した本が帰ってこない（そんなにないですが）、もしくは借りた本がなかなか読めなくて返せない（これはよくあります）、だから、①②が電子書籍でほぼ解決すると考えると、もう紙の本なんていらんんじゃないですか、ということになりそうである。

しかし、ではうちの本を全部電子書籍にして、紙の本は全部なくしましょう、ということにはならないだろうというのも、また確信を持って言えるのである。出版の世界でも、電子書籍がどれだけ発展しても、従来の紙媒体が絶滅することはないだろうと言われているそうだ。いろいろな理由があると思うが、私は紙の

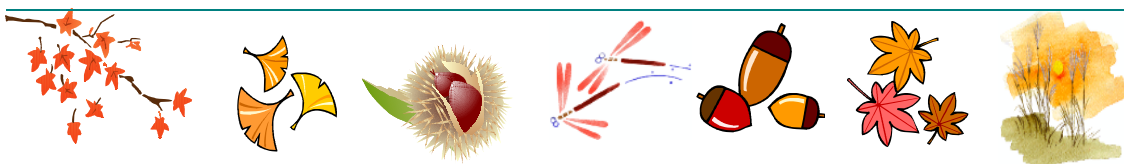
本に「かたち」があることが、理由のひとつになるのではないかと考えている。

どうして本を読むかという理由は様々あるけれども、読書の楽しみに加えて、「読んだ本を並べておく楽しみ」もあるという人は少なくないと思うが、どうだろう？「過去に読んだ本を眺めて思い出に浸る」「自分の成長を確認する」「自分はこんなに難しい本を読んでいると自慢する・一人で悦に入る」とか、いろいろな理由で本をずらっと並べたい人は結構いるのではと思う。

また、紙の本はその内容以上に、いろいろなメッセージを載せて存在するのではないと思う。例えば、さっきの③の本の貸し借りなどはその例だが、「本を貸す」というのは、ただモノを貸すというのと違って、「私はこんな本に感動する感受性を持っているけど、あなたは？」といった、言葉は悪いが相手を試すような意味合いもあるし、逆に相手に自分の中身を知られてしまうスリルも感じさせられる行為である。もちろん電子書籍でも、人に本を紹介することはできる。でも、紙の本を受け渡しするときのあの緊張感？というの、やっぱりかたちあるものだからこそと思うのだ。また、捨てられなくてとってある読まなくなった本とか、何度も読んでぼろぼろになった絵本とか、電子書籍オンリーになったら、存在しなくなるのだ。なんてさびしいだろう！

かくして、場所を塞ぎ続けるにもかかわらず、私は今日もせっせと紙の本を買っているのである。読まないといけない本が、どんどん積み重なっていく・・・こういう視覚的な圧迫感も、アナログな紙の本ならではのものだと思う。

（森野 うさぎ）



私たちは電子書籍と電子教科書に どう向き合うべきか

埼玉大学大学院教育学研究科学校臨床心理専修
孕石 敏貴

1. はじめに

今年7月、appleのiPadが日本市場に登場したとき、これまでPCで仕事や趣味等々をこなしてきたコンシューマの多くに、その操作性やスペックに関する斬新な発想という点で、予想はしながらも驚きをもって迎えられた事実は、いまだもって記憶に新しい。中国では、このiPadが登場する前からアンドロイドOSを搭載したiPadもどきの情報端末が何種類も登場した。キーボードにディスプレイと本体という組み合わせの「パーソナルコンピュータ」とよばれる電子機器は、今後数年のうちに特定の分野でしか扱われなくなるかもしれない。その一方で、日本は「ガラパゴス」といわれるような独自の携帯文化を作り上げてきた。技術的に世界トップレベルでありながら、独自仕様のため世界標準とは程遠い存在となっている現状をみたとき、教科書を含めた書籍の電子化という世界のおおきな流れに私たちはどのように向き合うべきであろうか。

2. 電子書籍

(1) 市場規模^{①②③}

日本の電子書籍市場は2002年に10億であったが2009年には574億円に成長した。しかし、これは約1.9兆円といわれる紙の出版物の市場規模の2.9%しか占めていない。この市場の大半は携帯で成り立っており、見るコンテンツとしてのコミックスが82%を占めている。問題は、市場規模に「魔法のiランド」等の無料サイトが含まれていないことにある。日本の電子書籍市場は、10年以上前から携帯を中心に成長しており、1ヶ月あたりの「魔法のiランド」利用者は約600万人に上ることから、ここでもガラパゴス的な普及と進化が垣間見られる。ちなみに、アメリカの市場規模は、約290億円（2008年）と、日本よりも小さな市場であるにもかかわらず、Kindleなどの電子書籍端末が最も普及しており、電子書籍の一般化が進んでいる。ここでの日本とアメリカとの違いは、日本がコミック中心であるのに対してアメリカが文芸書中心であることだろう。ところでIT先進国といわれる韓国では、電子書籍の市場規模は2009年には約95億円（2008文化産業白書）と推定されており、日本の市場規模に比べはるかに小さい。にもかかわらず、韓国は総額約46億円を投じて市場規模を5倍にしようとしている。韓国もアメリカも電子化の流れがいやおうなく加速している。

(2) 技術的側面^{④⑤}

インターネット環境の加速度的な普及で、テレビ、ゲーム機等々あらゆる電子機器がネットワークで結ばれる社会になる中、わが国では携帯電話、カーナビ、液晶テレビ等々ガラパゴス化する情報機器は数多くある。特に電子書籍に関係する携帯電話がSIMロックやiモード、写メール等世界標準化に失敗している規格下で普及していることを考えれば、携帯による電子書籍そのものがもはやガラパゴスともいえなくはない。その証拠にNTTドコモは2006年時点で世界最大のワイヤレスインターネットプロバイダであるものの、その大半が国内の利用者でしかない。世界は、日本製の何でも出来る高機能高価格な携帯電話よりも、個人にとって必要な機能のみをもつ手ごろな携帯電話のラインナップを求めているのである。このように、日本での電子書籍を展

開する電子ブックリーダーにはやや特殊性があるが、一般的にはアマゾン・キンドル(日本語非対応)、iPad、sony-リーダーがあり、iPadの登場以降国内外各メーカーがさまざまな機種を出しつつある。あくまで電子書籍としての機能に特化しているアマゾン・キンドルに対してiPadのようなモバイルPCとしての機能も併せ持つ機種などメーカーによって技術的な仕様はさまざま、何がリーダーのもつ機能としてベストかということの結論はまだ出ていない。その一端を示す電子書籍の電子化フォーマットにはEPUBをはじめとしてebi. j、AZW、XPDF等さまざまな形式があり、機種によって対応が異なるのが現状といえる。ただ、電子書籍化がすすむアメリカではEPUBが標準となりつつあり、日本語の特徴である縦書き・ルビに対応するための日本語要求仕様案を提案中である。様々な分野で技術がありながら仕様の世界標準化で遅れをとる日本の現状は電子書籍でも表出するのであろうか。

(3) 電子書籍のメリット・デメリット

電子書籍のメリットは概ね次のようなことではないかと考えられる。1. 誰でも容易に作成でき、誰もが発信者になりうること。2. 紙の無駄を省けコスト削減や環境改善に役立つこと。3. 情報の可用性・保持性が高まること。4. データの大容量化が可能になること。5. 出版工程の簡素化・流通コスト削減につながる。6. インタラクティブな展開が可能になること。電子書籍が拡大すれば、作者と読者がよりインタラクティブな関係になるだろう。他方、情報の真偽や価値の判断がこれまで以上に個人に求められることになり、より高度な情報活用力が求められる。これまで文化の一翼を担ってきた紙の書籍が電子書籍に変わる可能性は、そのメリットから十分見出せるだろう、

3. 電子教科書

(1) 教科書市場^{⑥⑦⑧}

日本の義務教育用教科書は、無償給付制度によって使用者がその費用を直接負担することはない。また、教科書検定制度によって学習指導要領に基づいた教授内容が標準化されており、業者ごとに学習内容や学習量が大きく異なるというわけではない。アメリカやフランスのように検定そのものがない国やイランや韓国などの国定教科書を用いている国に比べれば、バランスのとれた制度といえるが、検定制度そのものに賛否があるのも事実である。検定のないアメリカでは、どの教育段階でも教科書単価(大学レベルで約\$100~\$200、小中で約\$50)が高いため、リサイクル使用が一般的でクオリティを求める教科書市場そのものがないものの、電子書籍の普及に伴い大手教科書出版社では、教科書等の電子化を想定した開発ノウハウの蓄積が進みつつある。その証拠に2008年における教育マーケットの技術投資は約4兆3千億円であり、2013年には5兆円を超えると予想されている。

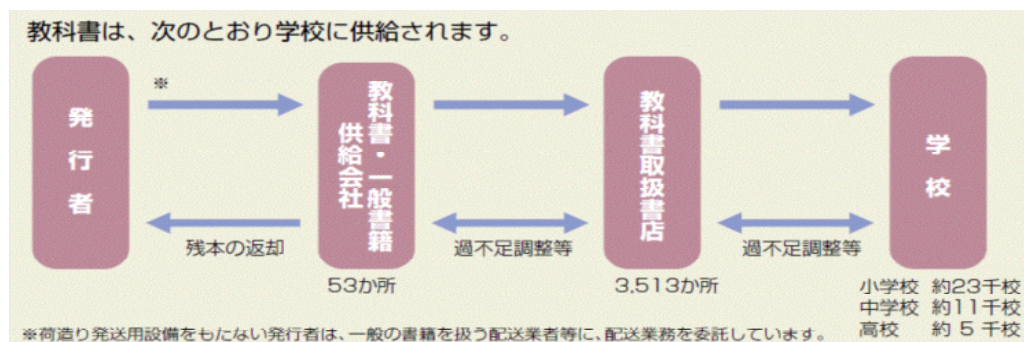


図1 教科書が子どもに届くまでの流れ

さて、およそ2年をかけて編集・検定を受けた教科書が教育委員会や学校等で採択されると、図1のような流れで学校に届けられ子どもに配布される。

2008年において小学校で用いる教科書の平均単価は337円で、中学校は484円である。この単価は年々少しずつ下がる一方、紙面構成のビジュアル化等もあり製作コストは上昇しているといえる。

さらに、小中高全体の教科書需要数についてみると、平成17年では1億4404万冊であったが、平成21年では1億3838万冊となっている。これらの数値から、平成21年度における教科書の市場規模はおよそ500億円程度と推定され、今後も生徒数減少に伴い需要数が減り続けることから、日本の市場規模が縮小していくことは間違いなく、出版に見切りをつける教科書会社が出る可能性すらある。

(2) 電子化の動向^{⑨⑩⑪}

韓国では2007年から教科書の電子化に関する実証実験を開始し、2011年からの電子教科書使用義務化が決まっている。他の国々をみても、おおむね電子化の流れに沿った動きをしている。日本では、2009年に当時の総務大臣が2015年までに全小中学校にデジタル教科書を配備しようというビジョンを提示し、今年度からそのためのモデル校選定が始まっている。8月に出された「新たな情報通信技術戦略」における教育分野の取組工程表においても電子教科や情報端末について書籍一般の電子書籍化の動向を踏まえつつ教科書、教材の電子書籍化、マルチメディア化について制度改正も含め検討・推進がうたわれている。また、民間においても今年7月「デジタル教科書教材協議会 (DiTT)」という電子教科書推進団体が発足し、情報通信分野を中心に100社あまりが会員企業として名を連ねている。ネットワーク回線速度等インフラに関する地域ごとの差があるものの、国全体として教科書電子化の流れが出来つつあることは確かだろう。

(3) 電子教科書のメリット・デメリット^⑫

電子教科書そのもののメリットは電子書籍とほぼ同様であり、常に最新のデータに書き換えやすく、文字データ以外の動画、音声といった付加価値がつけやすいことから教科書のカスタマイズ化や新しい授業形態の出現が考えられる。そもそも、想定される電子教科書は電子黒板等に表出して一斉視聴するタイプと電子書籍端末または電子教科書端末で各自が視聴するタイプの2種類が考えられており、授業での活用を踏まえたメリット・デメリットを考えなければ意味がないが、利用実験はこれからという状態である。しかし、この段階ですでに明らかな問題点は“新しい学びの形態にどれだけの教師が対応できるのか。”ということである。電子教科書云々の前に、学校現場が一斉授業から協働学習による学びのスタイル変革をより一層意識する必要があるだろう。

4. おわりに

ここまで述べてきた問題点以外にも、両者に共通する著作権問題やセキュリティの問題等様々な問題があり、超えるべき山は多いように思われる。教科書を含む電子書籍市場の可能性を日本国内だけの問題として考えるのはナンセンスである。プロバイダ（見方によってはベンダあるいはサプライヤといえるかもしれない）は市場規模を考えれば世界に目を向ける必要があり、ユーザは電子書籍から得られる第一次の知から世界とつながったWebを介して新たな知を獲得するという行為が重要なことから。この点において電子書籍や電子教科書を情報送受手段のひとつとしてとらえれば、発信者はどのような目的でこの手段を使うのか、受信者はどのような目的でこの情報を受け取るのかを常に意識していないと、メディアとしての価値は半減してしまう。したがって、学校での電子教科書による多面的な情報編集力の育成が、社会での電子書籍による探究的な情報活用力につながるといえ、そこに電子教科書の意義が見出せると考えられる。

今も昔も、資源もなにもないといわれるわが国が他国と渡り合うためには、「知恵」を振り絞ることしかない。2つのイノベーションをどのように上手く連動させるかが、新しい「知恵」を創出するパラダイムになるのではないだろうか。

参考文献

- ①<http://www.toyokeizai.net/business/industrial/detail/AC/cb8375d454ed0733da839da3a1369ea2/>
- ②<http://book.asahi.com/clip/TKY201009110123.html>
- ③http://www.dcaj.org/dcaj_news/nol47/oreport/article01.html
- ④http://www.nttdocomo.co.jp/binary/pdf/info/news_release/report/090213.pdf#search=iモード国内利用者数推移2006年
- ⑤<http://appetizer.jp/business/post-12.html>
- ⑥<http://www.textbook.or.jp/>
- ⑦<http://www.text-kyoukyuu.or.jp/attach/tdissue2006.pdf>
- ⑧<http://www.apptoiphone.com/2010/02/scrollmotion.html>
- ⑨<http://wiredvision.jp/blog/kogure2/201010/201010041230.html>
- ⑩<http://ditt.jp/>
- ⑪<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/100622.pdf>
- ⑫http://jukugi.mext.go.jp/library_view?library_id=273



けやきの窓



私の推薦図書

英語の学習について、いろいろな学生から日常的に相談を受けるようになって、6年ほどが経った。学生の悩み、あるいは知りたいと思っていることはそれぞれに異なるわけけれども、話を聞きながら、前提として疑うことのない英語という外国語との関係をもう一度考え直せば、問題がどこにあるのかもっと明確になるのではないかと思うことが、しばしばあった。

現在、日本の学校教育では、おおむね小学校の段階で、はっきりとした理由もなく英語を学習するよう求められ、それが大学まで長い期間続く。英語と日本人との関係については、その過程で教えられることはまずないが、その問題を真剣に考える上で、『日本人はなぜ英語ができないか』（鈴木孝夫著、岩波新書、1999年）は、すぐれた一冊だと思う。本書の中で取り上げられる、日本の英語教育全体にかかわるさまざまな論点は、出版から10年以上経つ今も、古くなっていない。

たとえば、これまで英語を学習しながら、さまざまな場面で否定的な意識を持たざる

をえなかった学生は、著者が言うように、言語の系統としても、また背景としての文化、宗教の点からも日本語とは異質な英語という言語に、日本にいながら習熟することが、「一般に考えられているよりもはるかに難しい」ことを理解するだけでも、これまで何かを誤解していたことに気づくだろう。また、ぼんやりと感じながらも明確に意識されることのない、「日本人の外国語に対する受け止め方、見方の特異性」について考えをめぐらすことにより、自分自身と英語との関係を相対化し、その関係に潜む、ある種のゆがみに気づくことが可能になるだろう。そして、他律的文明と自立的文明、日本人の自己植民地化現象等、筆者独自の視点に賛同するかどうかはともかく、大きな文脈の中で論じられる英語をめぐるさまざまな問題を筆者とともに考えた後ではじめて、自分が学ぶべき英語を明確に意識できるようになるのではないかと思う。

(英語教育開発センター長/教授 外山昇)



埼玉大学の 教育・研究と埼玉大学生生活協同組合

学習指導要領が改訂になったこともあって、ここ1年間に締め切りに追われながら、書いた原稿の量は、自分でも把握していない有様です。でも、形式的なあいさつ文は除いて、肩書きに生協の理事長としたのは生協の50周年記念誌とこの原稿だけです。

これは、生協を皆さんにご理解いただくための坂西図書館長のご好意と受け止め、生協とはどういう活動をしているのかをご紹介したいと思います。

いま、50周年と言いましたが、ちょうど50年前といえば、60年安保で激しく国論が2分されて、国会前がデモ隊で

埋め尽くされて、騒然とした時代でした。まさに「生協なんかやっている場合ではない」という雰囲気のあるときでもありました。

それから数年後に、私は大学に入ったのですが、当時の国立大学には、少なからず実家が貧しいが、勉強をしたいという学生がいました。実際、実家にアルバイト代を仕送りしている友人が50人のクラスの中に3人もいました。私には、あの激動の時代に生協ができた理由がよくわかります。学生生活を安心して送りたいという強い願いです。



埼玉大学生協店舗



生協書籍コーナー

さすがに現在では、仕送りをしている学生はほとんどいません。これは以前より豊かになった反面、仕送りをしなければならないような家庭の子弟が大学にいけなくなったこともあります。国立大の授業料も当時より50倍近くになっていますし、奨学金も受けにくくなってきました。他の要因もあって、親の平均年収では、東大がトップになったそうです(私

たちが『分数ができない大学生』を書いたのも、公立中高の落ち込みが年収による学力格差につながることを懸念してのことでした)。

勉学の志があっても大学に来ることができない若者への支援については別稿に譲って、大学での生協の役割について話を戻したいと思います。

生協はコンビニとは違います。教育・研究生活に関する福利厚生を担うために、教職員・学生が作った組織ですから、大前提は、「組合員の研究・教育にとって何が必要か」です。それゆえ、学生層の変化に伴って、その仕事も変化しています。現在行っている事業活動は、文具・書籍・食品等の店舗、食堂などの事業に加えて、チケット、共済、住居の斡旋、また食生活支援、学習支援などの情報提供、資格講座や就職セミナーの開催もあります。

また、これは学生委員会に負うところが大きなのですが、大学の入試の案内から始まって、スプリング・フェスティバル、オープンキャンパス、卒業式などさまざまな大学の行事へも協力しています。学生自治会が機能していない現在、このことは生協の組合員の要求とも一致しています。このような学生委員会の活動は、他の大学の生協にも広がっています。さらに、教育的な観点から見ると、埼玉大生協 OB が埼玉市民生協や全国の大学生協連の役員にも多数いることは、埼玉大の生協活動が実を結んでいることを示しています。

さきほど、「以前より豊かになった」と述べましたが、リーマンショック以来、親からの仕送りが減り、学生の収入が減って、しわ寄せは食費にいく傾向が見られます。

2008 年度に定めた第 9 期中期計画には、次の部分があります。

「…埼玉大生協はこの現状を目の前にして今再び共助の原点に立ち返り、自らの生活を語り合い、お互いの生活を守りあう取り組みを進めます。お互いの生活の不自由な点、リアルな問題を出し合い、短時間でその声に応える「頼りにされる生協」づくりを進めたいと思います。ま

た、学生の組合員活動を特段に重視します。自分と仲間を大切に共感と共有を広げ、人と地球に優しい豊かな人間力を獲得していただきたいと願っています。」

この最後の部分は、学生の教育・教養の向上を通してこそ実現できるので、本学の図書館とは、大いに協同していくべきだと考えます。

これに関連して、生協では、読書マラソンを企画しています。そこからは読書サークルも生まれています。学生委員会の機関紙アルファでは、定番として読書のページがあります。また、「読書のいずみ」の埼玉大学版も前理事長の竹長先生が監修しました。

私自身、中学生の頃は、とにかくたくさん本を図書館から借りてきて読む、「本の虫」でした。そのおかげで、国語だけはつねに良い成績で（専門の算数・数学の成績は平凡）、数学関係の本でベストセラー作家にもなれたのはそのおかげです。国語から遠い分野の人こそ、本を多く読んでおくべきなのです。

井上ひさしさんや本多勝一さん（それまですべて断っていたらしい）などの作家への講演依頼も、自分の本を同封することでスムーズにできました。当日の講演会には、生協が大きく貢献しています。他にきてくださった方には、森村誠一・中山千夏・筑紫哲也さんらの名前もあります（木下順二さんもいらっしやる予定でしたが体調を崩して断念）。

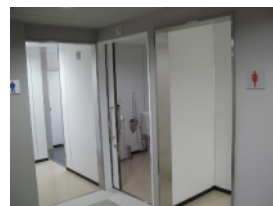
これからも、60 周年、100 周年と生活協同組合は歩み続けるでしょう。それには埼玉大学ならびに付属図書館との教育・研究・文化での協同が欠かせません。ご支援よろしく申し上げます。

経済学部 岡部恒治
(埼玉大学生生活協同組合理事長)



3階のトイレの改修が 終了しました

1, 2階は現在改修中です。
もうしばらくお待ちください。



既刊 「武蔵野」一覧

埼玉大学図書館報「武蔵野」は、図書館の動向や皆様のご意見などを紹介する小冊子です。「むさしの」の後継誌として、2009年6月から刊行しています。

1号(2009.6刊)

- ・「武蔵野」創刊(図書館長：坂西友秀)
- ・図書館ニュースの発刊によせて(総合情報基盤機構長：川橋正昭)
- ・旧制浦高記念展示室の完成を願って(旧制浦高同窓会常務理事：上田治三郎)
- ・館員通信(利用サービス係長：小野寺伸)

2号(2009.8刊)

- ・SUCRAについて(専門員：村田輝)
SUCRA(機関リポジトリ)で利用の多い文献トップ30

3号(2009.10刊)

- ・大学図書館に望むこと(埼玉県立白岡高等学校・教諭：若海由美)
- ・こんな図書サービスがあればいいな～(文化科学研究科博士課程：李芝善)
- ・けやきの窓(理工学研究科長：水谷忠良)
- ・館員通信(元利用サービス係：白本清香)

4号(2010.2刊)

- ・歴史史料デジタル化の現状：過去の記録は誰のものか(教育学部准教授：鈴木道也)
- ・けやきの窓：私の推薦図書(経済学部長：伊藤修)
- ・「図書館と県民のつどい埼玉2009」：「デカンショ」と「フェアブル」(利用サービス係長：小野寺伸)
- ・「埼玉県大学・短期大学図書館協議会」研修会報告(SALA 広報担当：湊伸子)
- ・ホームページがリニューアルされます！(工学部4年 渡邊雄)

5号(2010.4刊)

- ・〈フレッシュマン特集号〉
- ・図書館紹介(図書館長：坂西友秀)
- ・図書館オリエンテーション
- ・図書館発見
「留学生・留学希望者にうれしいニュース」
「グループ学習室新設」
「官立浦和高等学校記念資料室」
- ・「デカンショ」によせて(埼玉大学教養学部准教授・哲学：高橋克也)
- ・子どもと図書・文化
「埼玉大学図書館の児童サービスについて(埼玉県立久喜図書館：山元明美)」
「そよかぜを知っていますか(そよかぜ保育室：橋本慶子)」
- ・けやきの窓(教養学部長／教授：高木英至)

6号(2010.7刊)

- ・〈埼玉大学エコ特集〉
- ・AGRICULTURE(図書館長：坂西友秀)
- ・埼玉大学から発信！有機農業でつながる輪(経済科学研究科博士前期過程：堀合知子)
- ・有機農業に興味を持たれた方へ(経済科学研究科博士前期過程：堀合知子)
- ・有機農業に出会って(経済科学研究科1年：山本仁)
- ・お薦めの本(経済科学研究科1年：山本仁)
- ・埼玉大学有機農業研究会の展望(経済科学研究科：有坂昌平)
- ・本の紹介(経済科学研究科：有坂昌平)
- ・日本大学文理学部図書館研修(図書資料係：早川雅代)
- ・けやきの窓(教育学部長／教授：山口和孝)
- ・全国国立大学図書館協会総会報告(図書館長：坂西友秀)